中世・近世期の公卿
3170余人の詳細なデータベース

公家事典

新訂版

橋本政宣［編著］

2024年
12月発売！

新史料の公家家伝を取り入れて構成
公家制度と朝廷を理解するために必備！

吉川弘文館

第一版刊行後に調査された公家家伝などの記述を反映させ、家名解説・系図・履歴などで構成した新訂版！

公家事典

新訂版

橋本政宣［編著］（東京大学名誉教授）

平安末から明治元年に至る
公家・武家・社家・諸大夫家の公卿三一七〇余人を収録！



装幀：清水良洋・宮崎萌美

五摂家成立期の久安六年（一一五〇）から明治元年（一八六八）に至る、公家・武家・社家・諸大夫家の公卿三一七〇余人を収録。第一版刊行後に調査された公家家伝などの記述を反映させ、総説・家名解説・系図・履歴などで構成した新訂版。付録廣橋家蔵祖本『公卿補任』（当今）。明治維新まで継承された公家制度と中世・近世期の朝廷の理解に必備。

定価２４２００円

978-4-642-01483-0

菊判（縦220ミリ×横152ミリ）

上製・函入・１１１２頁

編著者紹介

橋本政宣（はしもと　まさのぶ）

1943年、福井県生まれ
1965年、國學院大學文学部史学科卒業
1993年、東京大学教授（史料編纂所）
現在、東京大学名誉教授、博士（歴史学）、舟津神社宮司

〔主要著書〕
『近世公家社会の研究』吉川弘文館、2002年
『神道史大辞典』（共編）吉川弘文館、2004年
『後陽成天皇』（編著）宮帯出版社、2024年

吉川弘文館　〒113-0033・東京都文京区本郷7-2-8〔URL〕https://www.yoshikawa-k.co.jp/
電話 03-3813-9151（代表）／FAX 03-3812-3544／振替 00100-5-244　価格は10%税込　'24.11

キリトリ線

注文書

『公家事典（新訂版）』を（　　冊）注文します。

978-4-642-01483-0

お名前　　お電話

ご住所　〒

●吉川弘文館　特約書店名

序（抄）

前近代において、天皇、朝廷に直接仕えていた貴族集団である公家（公家衆）は、その身分が生成された平安中期から江戸末期まで、約八百年に亘り特権階級として存続し続けた。公家という言葉は、すでに奈良時代から見えるが、「こうけ」あるいは「おほやけ」と読み、君主が政治をおこなう所の朝廷や国家のことを意味していた。それが国王である天皇自身を指す言葉ともなり、武士勢力が新しい公権力を樹立し、武家と呼ばれるにともない、朝廷の官人、とくに上層の廷臣の総称となり、公卿と同じ意味にも用いられるようになった。近世に廷臣の家格が固定してからは、昇殿を許される家柄である堂上家とほぼ同じ用語となった。

本事典は、大臣以下参議以上、三位以上の公卿の毎年の官員録を集成する『新訂増補公卿補任』に拠り、公家身分の家系が生成する平安末期、具体的な目安として、五摂家筆頭の近衛家の始祖・基実の元服の年（久安六年〈一一五〇〉、第一篇四二六頁）記載の公卿を初めとし、明治元年（一八六八）に至る、すべての公卿を家別・時代順に纏めたものである。最初に総説を記し全般的に解説し、各家流、各家の前にはその伝を載せた。

『公卿補任』は神武天皇の代から明治元年までが収録されている。文武天皇以降は一年ごとに別掲にし、順次書き継がれたものであり、記載の文中に若干の不備や誤脱がないわけではないが、わが国の国初以来の長大なる官員録がいまに伝存してきたことは、誠に類のないことである。内容は、公卿をその官位の順に配列し、氏名の下にそれぞれ年齢、兼官、叙任の月日、薨去または出家の年月等を注記し、室町末期頃より以降のものには、さらにその年に奉仕した主要な行事や、在国その他の事柄等をも記載している。日本史の研究上、きわめて重要、かつ重宝なものである。

しかし大部なものであるから、家別にしたものがあったら至便であろうとして出来たのが『諸家伝』であろうし、この簡略本が『諸家知譜拙紀』といえる。ただ前者は全ての堂上家に及ばず、収載年代の末も諸家により一致しない。後者は貞享三年（一六八六）に初めて板行、天保九年（一八三八）まで改訂七版におよんだ。ことに第三版の『改正増補諸家知譜拙記』は、『新訂増補萬世雲上明鑑』の編者としても知られる速水房常が諸家系譜に新たな考索等を加え、また配列にも妙味がある。本事典においても、諸家の配列にはこれを准拠した。

なお付録として、現行流布本・山科本の祖本である廣橋本の、いま一つの異本『公卿補任』（弘治四年～永禄十一年分、一冊、廣橋興光氏所蔵）を翻刻付載する。

平成二十二年正月

本事典の特色

▼基本史料『公卿補任』全五冊（新訂増補国史大系本第五三巻―第五七巻）をこの一冊に凝縮

五摂家創始につながる近衛家始祖藤原基実が元服した久安六年（一一五〇）（第一篇四二六頁）から明治元年（一八六八）（同第五篇）に至る間の、『公卿補任』全五冊に掲載される三一七〇余人を、個人別の官歴に編集し直して一冊にまとめた。明治維新を迎えるまで継承された公家制度と中世・近世期の朝廷を理解するための基本的事典。

▼新史料の公家家伝の記述を反映させた新訂版

米国カリフォルニア大学バークレー校の東アジア図書館に所蔵される三井家旧蔵古典籍類に収められていた公家家伝。これまで江戸中後期までしか及んでいない『諸家伝』に拠るしかなかったが、この新史料は江戸末期に大外記押小路家が編纂に携わって作成された貴重な官撰の公家の家譜であり、本書はその記述を反映させた新訂版。

▼公卿を家別にまとめて官位叙任順に配列し、家ごとに家名解説と系図を付けた分かりやすい構成

冒頭の総説では公家制度全般を分かりやすく解説。五摂家、閑院流、花山院流、中御門流、御子左流、日野流、勧修寺流、四条流、水無瀬流、高倉流、源氏流、菅氏流、平氏流、清原氏流、安倍氏流、大中臣氏流、卜部氏流、丹波氏流等の諸家、武家（畠山・織田・豊臣・徳川など）、社家（内宮・外宮・鴨社・賀茂社・松尾社・平野社・稲荷社・春日社・大原野社・住吉社・日吉社・吉田社など）、諸大夫（伏見宮・近衛家など諸大夫）の順に公卿をまとめ（官位叙任順）、家ごとに家名解説と系図を付けた。

▼中世・近世期における公卿三一七〇余人の、史料にもとづく詳細な履歴をまとめたこれまでにない人名事典

官歴は、新訂増補国史大系本『公卿補任』の原文通りとし、諸伝本との異同、校訂注なども省略せずに掲載し、諸家の家譜などで新たな注も加えた。また、官歴のほかに、死没年月日、父、母、一字名、法名、日記、新訂増補国史大系本『公卿補任』初出の篇頁、『大日本史料』伝記掲載の編頁などを付加して利用者の便を図った。新訂にあたり、父母や号・法名の記載を充実させ、近年刊行の『大日本史料』の情報を加えた。

▼廣橋家所蔵祖本『公卿補任 當今』（正親町天皇、弘治四年（一五五八）―永禄十一年（一五六八）分）をはじめて翻刻

現行流布本『公卿補任』の原本とされる廣橋本を伝えた廣橋家所蔵の祖本『公卿補任 當今』（正親町天皇、弘治四年（一五五八）―永禄十一年（一五六八）分）を付録として翻刻。流布本にない記載が多く見られる貴重な史料を活字化した。

▼索引をさらに使いやすく

巻末には家名索引と人名索引を掲載。第一版に収載した音読み索引のほか、項目見出しの読みの五十音順索引を新たに加え、活用の幅を広げた。

新訂版の辞

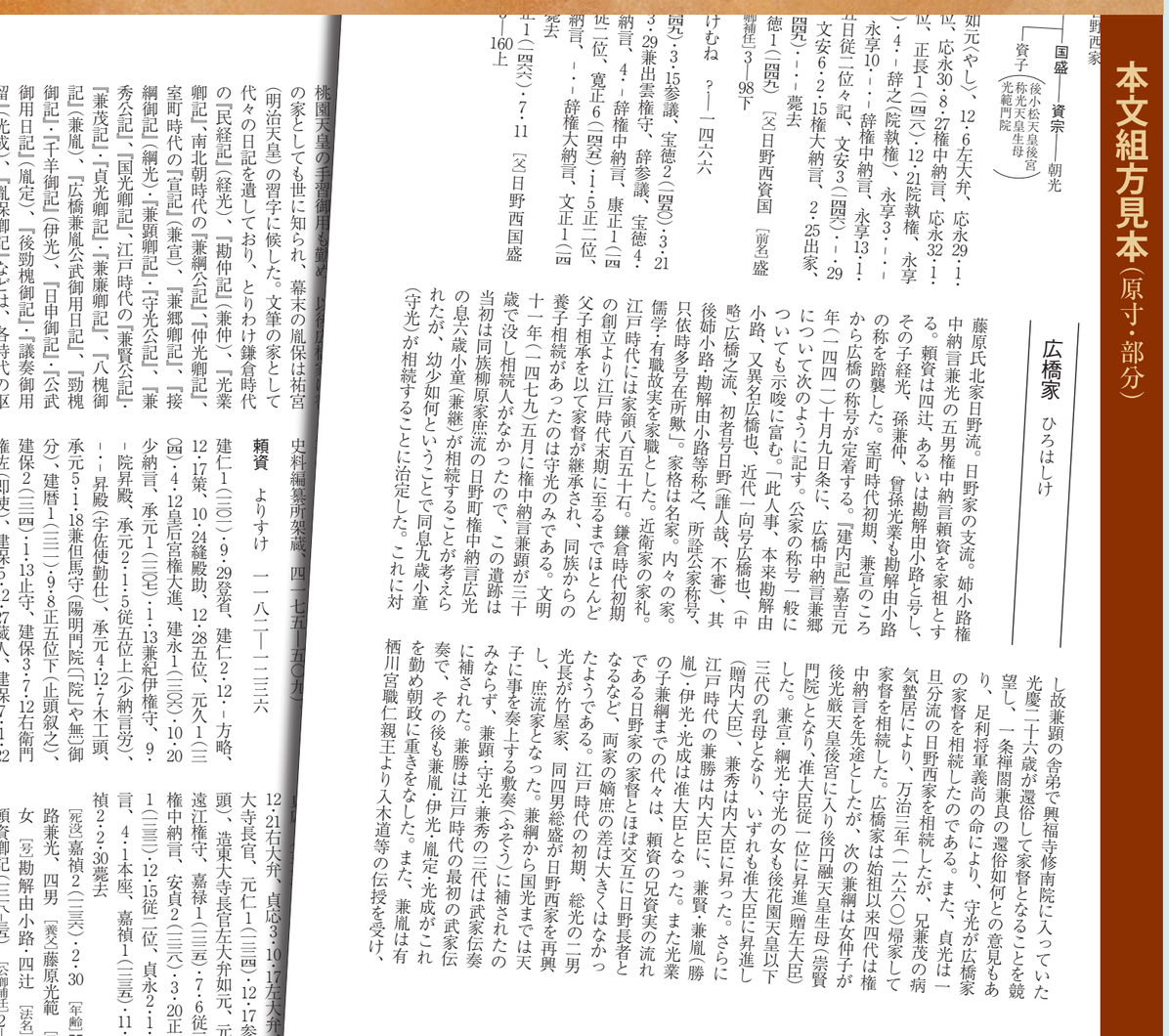
本書の第一版が刊行されたのは、平成二十二年（二〇一〇）三月のことである。当初は『国史大辞典』の朝廷公家関係の諸項目を纏めた辞典が計画されていたようであるが、人名は『公卿補任』に記載の内容にとどまるものが多く、これをデータベース化し、その前に公家の詳細な概要を載せることとなり、全体の統一をはかるためにも、編者がその全文を執筆することとなった。

公家身分の家系が生成する平安末期から階層化が進み、摂家以下の家格・家職が形成され、家の分裂・中絶・再興などを経て江戸末期にまで及んだ家数は、都合一三八家を数える。各家関係史料の博捜・吟味、そして考証・執筆、夜を日に継いでの日々、丸二年の月日を要した。ために付載の「補注」には充分な校正が及ばず忸怩たるものがあり、再版の話があっても逡巡するばかりであった。新訂版を思い立ったのは、カリフォルニア大学バークレー校の東アジア図書館にて、幕末期官撰による編纂で三井家旧蔵の公家家伝九十九冊を実見したことによる。朝廷の局務職・大外記押小路家により集成されたものである。「補注」の記述にも反映させえたことは幸いであった。第一版において『公卿補任』の膨大な記事を念入りに入力された川島慶子氏に改めて感謝するとともに、改訂に当たり助力を頂いた藤井悠成氏に謝意を表したい。

令和六年十月十五日

橋本政宣

本文組方見本（原寸・部分）



国盛―資宗―朝光
資子（後小松天皇後宮 称光天皇生母 光範門院）

如元（やし）、12・6左大弁、応永29・1・16正四位下、応永30・8・27権中納言、応永32・1・5正二位、正長1（一四二八）・12・21院執権、永享3・1・29辞之（院執権）、永享3・1・29辞権中納言、永享10・1・1辞権中納言、永享13・1・5従二位々記、文安3（一四四六）・2・15権大納言、2・25出家、文安6・2・15権大納言、2・25辞権大納言、文正1（一四六六）・1・1薨去

徳1（一四四九）〔文〕日野西資国〔前名盛卿補任〕3―98下

けむね ?―一四六六

四五）・3・15参議、宝徳2（一四五〇）・3・21兼参議、宝徳4・3・29兼出雲権守、辞参議、宝徳4・4・1辞権中納言、康正1（一四五五）・5正二位、寛正6（一四六五）・1・5正二位、寛正6・1・13薦紀伊権守、9・-院昇殿、承元2・1・5従五位上（少納言労）、-・-昇殿（宇佐使勤仕）、承元4・12・7木工頭、承元5・1・18兼但馬守（陽明門院〔院〕や無）御分）、建暦1（一二一一）・9・8正五位下（止頭叙之）、建保2（一二一四）・1・13止守、建保3・7・12右衛門権佐（即使）、建保5・12・27蔵人、建保7・1・22右少弁（止佐）、2・25止蔵人、承久1（一二一九）・11・13左少弁、承久2・1・23右中弁、四位、還昇、12・21右大弁、貞応3・10・17左大弁、大寺長官、元仁1（一二二四）・12・17参議頭）、造東大寺長官左大弁如元、元仁2・7・6従三位、遠江権守、嘉禄1（一二二五）・7・6従二位、権中納言、安貞2（一二二八）・3・20正三位、1（一二三一）・12・15従二位、貞永2・1・28参議、4・1本座、嘉禎1（一二三五）・11・7禎2・2・30薨去

〔死没〕嘉禎2（一二三六）・2・30〔年齢〕55

路兼光、四男〔養父〕藤原光範〔母女〔号〕勘解由小路・四辻〔法名〕信頼資卿記（一二八一歳）〔公卿補任〕2―1本朝続文粋5―10―611

経光 つねみつ 一二一三―七四

建保6（一二一八）・11・16東宮蔵人（今日立坊）、承久3（一二二一）・1・9穀倉院学20歳人（今日太子受禅）、7・9止蔵也）、承久4・1・6文章得業生（超上人）、貞応2（一二二三）・1・27四2・7献策（次序墻壁、弁論多少）、式倫問、2・9判、3・1叙爵、4・7治嘉禄2（一二二六）・7・7昇殿、安貞2（一従五位上、9・16補蔵人、寛喜1（一正五位下（北白川院御給）、寛喜3・宮権大進、貞永1（一二三二）・10・4蔵人（

桃園天皇の手習御用も勤め、北家の家としても世に知られ、幕末の胤保は祐宮（明治天皇）の習字に備えて代々の日記を遺しており、とりわけ鎌倉時代の『民経記』（経光）、『勘仲記』（兼仲）、『光業卿記』、南北朝時代の『兼綱公記』、『仲光卿記』、室町時代の『宣記』（兼宣）、『兼郷卿記』、『接綱御記』（綱光）、『兼顕卿記』、『守光公記』、『秀公記』、『国光卿記』、江戸時代の『兼賢公記』、『兼茂記』、『貞光卿記』・『兼廉卿記』、『八槐御記』（兼胤）、『広橋兼胤公武御用日記』、『勁槐御記』（伊光）、『日甲御記』・『公武御用日記』（胤定）、『千羊御記』（伊光）、『後勁槐御記』・『議奏御用留』（光成）、『胤保卿記』などは、各時代の枢要な日記である。明治十七年（一八八四）賢光のとき、叙爵内規により伯爵を授けられた。

